第 6 回

『「鎖国」という外交』（上）

ロナルド・トビ、 『日本の歴史』第９巻
小学館、2008年

今回紹介するのは**ロナルド・トビ氏の『「鎖国」という外交』（2008年、小学館の『日本の歴史』シリーズの第９巻）**です。

著者のロナルド・トビ氏はアメリカのイリノイ大学の名誉教授で、1942年ニューヨーク州生まれの生粋のアメリカ人です。コロンビア大学文学部博士課程を修了され、専攻はなんと日本および東アジアの近世・近代史です。朝鮮通信使の研究をきっかけに、日本近世を「鎖国」と見なす従来の歴史観（「鎖国史観」）に疑問を抱き、１９７０年代から日本近世像の見直しを提言してこられました。

第1回日本研究功労賞を受賞したり、小学館版『日本の歴史』シリーズの編集委員等を歴任されたりと活躍されています。2000～02年度には、東京大学大学院人文社会系研究科教授をつとめられました。

今回紹介する**ロナルド・トビ氏の『「鎖国」という外交』**は非常に面白い作品です。

これまで、日本の江戸時代は「鎖国」だったとみなされてきました。日本は200年以上にわたって、一部の例外を除いて外国との付き合いを絶って「国を閉ざしてきた」し、世界の発展から取り残されてきたという「鎖国史観」に、多くの日本人は染まってきました。

でも、ロナルド・トビ氏は、江戸時代の日本は決して閉鎖されていたわけでも、孤立していたわけでもなく、実際には、日本は近世を通じて中国・朝鮮など東アジア世界と密接に繋がっているといいます。

これまでの考え方＝「鎖国史観」は、対西洋に限った偏った見方に過ぎず、江戸時代を通じて日本の外交や政治経済は常に出島・琉球・松前・対馬という「四つの口」を通して、東アジア諸国と密接な関係にあり、幕府の外交政策は東アジアの地域経済にとっても極め

て重要な役割を果たしていました。

近世日本の外交方針は決して「国を閉ざす」という消極的なものではなく、みずからの構想のもと主体的に選択したものだったといいます。「鎖国史観」は、80年代以降の研究を通じて歴史学的にはほぼ否定され、近世日本は「鎖国」ではなかったという認識が主流となっているといいます。

しかも、トビ氏によると、江戸時時代の日本を「鎖国」とみなす考え方は江戸時代初期にはなく、18世紀後半にロシア船の来航が相次ぐようになってから松平定信が「鎖国」こそ幕府開闢以来の伝統であると表明した一種の「過去の書き換え」に由来するのだそうです。

という内容が、今回取り上げる**ロナルド・トビ氏の『「鎖国」という外交』**の概要です。

まずは、いわゆる「鎖国」体制に入る前の江戸時代の日本の外交・交易から始めましょう。このあたりは、**『「鎖国」という外交』**ではなく、**山川出版社の教科書『詳説日本史』**など別の本を参考にしながらまとめていきます。

閉ざされた２００年??

江戸時代の外交政策というと「鎖国」と反射的にイメージしますが、家康や秀忠の時代から、つまり江戸時代の最初から「鎖国」していたわけではありませんよね。

ここで、江戸幕府ができる前後の**徳川家康の動き**を見てみましょう。

1600年（慶長5年）、関ヶ原の戦いの半年ほど前に、オランダ船のリーフデ号が豊後に漂着しました。家康は早速リーフデ号の乗組員を取り調べ、江戸に招き、外交・貿易の顧問とします。実はこの頃、スペインから独立したオランダと毛織物工業の発達したイギリスとが台頭し、両国は東インド会社を設立して、アジアへの進出をはかっていました。

その後、オランダは1609年に、イギリスは1613年に幕府から自由貿易の許可を受け、肥前の平戸に商館を開きます。こうして新教国オランダとイギリスが日本との貿易に参入してきました。また、家康は朝鮮や琉球王国を介して明との国交回復を交渉しましたが、明からは拒否されてしまいます。

家康はスペインとの貿易にも積極的で、スペイン領のメキシコとの通商を求めて、京都

の商人を派遣しました。また、仙台藩主伊達政宗も1613年に家臣の支倉常長をスペインに派遣してメキシコと直接貿易をひらこうとしますが、残念ながら通商貿易を始めることはできませんでした。

ここで、質問です。家康が外交・貿易顧問として招いた外国人２人は誰でしょうか？

航海士ヤン・ヨーステン（オランダ人）と水先案内人のウイリアム・アダムズ（イギリス人）でした。

次の質問。家康がメキシコに派遣した京都の商人は誰ですか？

田中勝介でしたね。この田中勝介はアメリカ大陸に渡った最初の日本人とされています。

もう１問。支倉常長の使節を何と言いましたっけ？

慶長遣欧使節でしたよ。

ところで、旧教国ポルトガルはどうしていたのでしょうか？　当時、ポルトガル商人は、マカオを根拠地に中国産の生糸を長崎に運んで巨利を得ていました。それまでは琉球王国が中継ぎ貿易で富を得ていましたが、その琉球に取って代わってしまったのです。幕府は1604年、糸割符制度を設けて、糸割符仲間とよばれる特定の商人らに輸入生糸を一括購入させ、ポルトガル商人らの利益独占を排除していきます。

はい、またまた質問です。特定の商人とは、どこの特定商人なのでしょう？

京都・堺・長崎の商人でしたね。この３つの町の商人らに糸割符仲間を作らせ、この仲間が毎年春に輸入生糸の価格を決定し、その価格で輸入生糸を一括購入して、これを仲間の構成員に分配しました。後に、江戸と大坂が加わって「五カ所商人」と呼ばれましたよ。

さて、このあたりは**講談社の『日本の歴史　第１９巻』**を参考に、まとめていきます。

日本人の海外進出は豊臣秀吉時代に引き続いて盛んで、ルソン・トンキン・アンナン・カンボジア・シャムなどに渡航する商人たちの船もたくさんありました。

そこで、家康はルソン・トンキン・アンナン、カンボジア、シャムなどの東南アジア諸国に対し、日本国内の内乱を平定したこと、また家康の朱印状（渡航許可証）を持った日本の朱印船の保護と相互通商を求める国書を出しています。

これは徳川幕府が日本の正式な政権であることを告げ、その返書を得ることで対外的な認知を求めるものでした。つまり、大坂にいる豊臣秀頼にではなく、徳川家康ないし幕府にあることを確認することに狙いがありました。しかも、国書を出すときには「日本国源家康」という署名がされていました。

ですから、江戸幕府は朱印船貿易という「貿易の統制」を行ったと言えます。なぜ「統制」かと言えば、家康の発行する朱印状がないと海外貿易ができないからです。

ところで、朱印船貿易がさかんになると、海外に移住する日本人も増加し、南方の各地に自治制をしいた日本町が建設されました。鎖国を迎える１７世紀初頭、海外の日本町に居住した日本人は5000人を超えていたと言われます。

ちなみに、朱印船を出した大名や商人にはどんな人がいましたっけ？

大名ならば、島津家久、有馬晴信。商人ならば、長崎の末次平蔵、摂津の末吉孫左衛門、京都の角倉了以、茶屋四郎次郎らがいましたね。

次に、渡航した日本人の中で、アユタヤ朝の首都アユタヤにあった日本町の長で、のちにリゴールの太守（長官）になり、政争で毒殺された人物は誰でしたっけ？

そう、駿府出身の山田長政でしたよね。

以上のように、江戸時代の初期は「国を閉ざす」どころか、南蛮人や紅毛人と交易をしたり、東南アジアに出掛けて交易を積極的に行ったりしていました。また、スペインとの貿易を行おうとしました。

ところが、活発に行っていた海外との貿易も、幕藩体制が固まるにつれて、日本人の海外渡航や貿易に徐々に制限が加えられるようになっていきました。

その理由や経過は、**山川出版社の教科書『詳説日本史』**によれば、第１にキリスト教の禁教政策と、第２に幕府が貿易の利益を独占するためでした。

そのため、1616年には中国船を除く外国船の寄港地を平戸と長崎に制限し、1624年にはスペイン船の来航を禁じます。ついで1633年には、奉書船以外の日本船の海外渡航を禁止し、1635年には、日本人の海外渡航と在外日本人の帰国を禁止し、中国船の寄港を長崎に限定しました。

1637年には島原の乱が起きます。この乱は、飢饉のなかで島原城主松倉氏と天草領主寺沢氏とが領民に苛酷な年貢を課し、キリスト教徒を弾圧したことに抵抗した土豪や百姓が起こした一揆でした。島原半島と天草島は、かつてキリシタン大名の領地で、一揆勢のなかには有馬晴信と小西行長の牢人やキリスト教徒が多数いました。天草四郎を首領にして原城跡に立てこもった３万余りの一揆勢に対して、幕府は九州の諸大名ら約12万人の兵力を動員して、翌1638年、ようやくこの一揆を鎮圧しました。

その後、幕府は1639年にポルトガル船の来航を禁止し、1641年には平戸のオランダ商館を長崎の出島に移し、オランダ人と日本人との自由な交流も禁じて、長崎奉行が監視することになります。こうしていわゆる「鎖国」の状態となって、以後、日本は200年余りの間、オランダ・中国・朝鮮・琉球王国以外の諸国との交渉を閉ざすことになった、と教科書には書かれています。

目的の１つはキリスト教禁止

幕府が「鎖国」をした理由の１つは、キリスト教対策なんですね。

ザビエルが来て以来、半世紀もたたないうちにキリスト教信者は数十万人におよんだといいます。戦国時代が終わり、元和偃武に到り、新たな社会秩序が編成されるような時代になります。しかし、将軍や大名にとって、キリスト教の教義と外国人宣教師、さらにはキリシタンたちが障害になっていきました。宣教師の国外追放や信徒の弾圧が繰り返されたのも、そのためです。

大濱徹也氏の『講談日本史』（同成社、２００５年）では、そのあたりのことを、以下のように指摘されています。

日本が・・・キリシタンの禁制をやったのは、一つにはキリシタン領国が真宗の本願寺領国のような形で出現する危険性につながることを恐れてのことだ。

キリスト教の人間を平等とする考えが、士農工商という幕府の身分制と相容れないからだという見解があるが、それは違う。神につくられた人間は平等だと言うことと、身分制の可否は別の話で、キリスト教には貴族の政治を容認する歴史もある。問題は、キリスト教が持つ宗教的な秩序が俗世間の秩序に一体化することで出てくるものであり、それは将軍を唯一の王にしようとする政治システムとぶつかるのだ。すなわち地上の王のさらにその上に精神の王がいると説くキリスト教的世界観と幕府権力の対立だ。さらに、それは長崎教会領をはじめとするローマの出先となる領国が国内に多くできることへの危機感を生

み、その結果、キリスト教は厳禁されるのだ。

さて、この後、キリスト教を禁止する政策が実施されていくことになります。ただ、キリスト教を禁止するだけですむかというと、そう簡単ではないのです。

なぜなら、宣教師だけが日本にやってきているわけではないからです。宣教師たちは、ポルトガルの貿易船と一緒にやってきているからです。ポルトガル人宣教師は国内に入れたくないが、ポルトガル船は国内に入れて貿易をしたい、というのが幕府の本音なんです。だから、宣教師を国外に追放してしまうと、ポルトガルとの貿易に支障がでてくるのです。

幕府にとってポルトガルとの貿易がなくなることは痛手なのですが、歴史は上手い具合に動いていきます。ポルトガルに代わり、プロテスタントのイギリスやオランダといった新しい国が貿易を求めてやってくるようになったのです。特に、スペイン・ポルトガルにくらべて遅れて極東貿易に参加したイギリス・オランダは、日本に対して貿易と引き替えにキリスト教布教の許可を求めるという態度をとりませんでした。キリスト教は困るが、貿易による利益は放棄したくないと言うのが幕府の本音ですから、交易国としてはイギリス・オランダは格好の相手となります。旧教国ではなく、これらの国は経済と宗教を分離させているので、幕府にとっては願ったり叶ったりでした。

しかし、あっさりとポルトガル人を日本から追放できないのです。なぜでしょうか？そもそもポルトガルは何を日本にもたらしてくれたのでしたっけ？

日本の必需品としては、生糸や絹織物、あるいは中国の薬種がありますが、これらの品物は、実はポルトガル人が最大の運び手でした。すでに日本人の朱印船貿易も禁止（1633年に奉書船制度に転換）されていましたから、ポルトガル人を追放すると、貿易ができなくなってしまうのです。そこで、幕府は、ポルトガルに代わってオランダが必需品を持ってきてくれるかどうかをじっくりと検討したのです。つまり、ポルトガル人追放を決めるまでは、色々調査し、審議して、ようやくその政策に踏み切っているのです。

元々、ポルトガルは中国沿岸にマカオを持っていて日本との貿易に有利でした。ところが、オランダはようやく台湾との関係が始まったばかりの時期で、中国の商品を日本に運ぶ商人としては、オランダはポルトガルにかなり後れをとっていました。

1639（寛永16）年４月２０日、江戸城中で最終的な評定が行われ、オランダ商館長のカロンが呼び出され、カロンは地図を見せながら安全な航路について説明したといいます。

こうして、キリスト教を禁止しながら、今まで通りの貿易は続けられるという「鎖国」

が始まります。

前回のシリーズで紹介した**『ケンペルの見た徳川ジャパン』**では、次のように指摘しています。

いわゆる「鎖国」を「ポルトガル人追放」と言い換えると、正確じゃないか。

鎖国の実態は、ポルトガル人追放という政策なんですね。こうしてヨーロッパの大部分に対しては国交を絶ちますが、アジアに対しては国を閉ざしたわけではありませんよ。

このあたりの解説が**『日本の歴史　第１９巻』（講談社）**にあるので紹介します。

１６世紀に海禁政策を取る明との間で事実上の交易関係を担い、大量の中国産生糸の交易を担っていたのは中国船の「唐船」であり（これが海賊化すると倭寇になる）、中継ぎ貿易を行う琉球であったが、ここに参加してきたのがマカオに根拠地を得たポルトガルだった。家康はポルトガルとの交易を掌握すべく、慶長9年（1604年）に糸割符制度を設け、その一方で、慶長5年豊後に漂着したリーフデ号のウイリアム・アダムズ（三浦按針）やヤン・ヨーステンを厚遇し、新教国イギリス・オランダとの関係を作ろうとした。

ヨーロッパでは1588年にスペインの無敵艦隊がイギリスに敗れた頃から、新旧勢力のバランスが変わり始め、１６００／０２年に相次いで東インド会社を設立したイギリス・オランダが東アジアへも進出し、しきりにスペイン・ポルトガル船の襲撃・略奪を繰り返していた。そして、家康の朱印状を得た朱印船もまたこれらの地域に展開し、日本が求めた中国産の生糸・絹織物、東南アジアの蘇木・鹿皮などの商品をめぐって、以後、ヨーロッパの新旧両勢力、そして日本の朱印船によって、三つどもえの激しい競争が行われることになった。そして旧教国が布教と貿易を一体として領土拡張を行ってきたことから、それはキリシタン問題と深く関わらざるを得なかった。

実はこの頃、日本国内や日本近海で様々な事件が起きていました。ただし、教科書にはまったく記載されていないことが多いのです。

日本史の授業でも1612年に幕領でキリスト教が禁止され、翌年に全国に拡大されることを教えます。

この背景には**「岡本大八事件」**がありました。この事件は、家康の側近本田正純の家臣岡本大八とキリシタン大名有馬晴信との贈収賄事件で、岡本もキリシタンでした。この事件をきっかけに、まず駿府家臣団のキリシタン武士が摘発され、1612（慶長17）年8

月に、家康はキリシタンを一般庶民に到るまで全面的に禁止していきます。

1620（元和6）年には**「平山常陳事件」**が起きます。これはマニラから日本へ向かっていた貿易商人平山常陳の船が、台湾近海でイギリス船に拿捕された際、スペインの宣教師２人が船底で発見されたため、平戸へ曳航された事件です。オランダ・イギリスの両商館長は合同で江戸参府を行い、朱印船が宣教師の密航に使われているとして、その規制を訴えます。それに対して、常陳の側は２人は商人であるとし、オランダ・イギリスの海賊行為を告発します。

1628（寛永5）年にはアユタヤで**長崎町年寄高木作右衛門の朱印船がスペイン艦隊に撃沈**されます。この時は、ポルトガルがスペイン支配下にあったので、幕府は長崎のポルトガル船２隻の積荷を代償として差し押さえ、以後寛永7年までポルトガル交易は中断します。それだけではありません。この頃オランダは台湾南部のタイオワンに基地を築いていましたが、以前からこの港を中国との出合貿易に利用していた朱印船にオランダが課税したことをめぐって衝突する**「浜田弥兵衛事件」**が起きます。そして寛永5年から9年までオランダとの交易も途絶することになりました。

つまり、いわゆる「鎖国令」が出る前に、なんとポルトガルもオランダも「出入り禁止」になったのです。イギリス船は後で触れる「アンボイナ事件」により1623（元和9）年に日本から撤退しますし、スペイン船は1624（寛永元）年に「来港禁止」の処置がなされています。残る新教国オランダと旧教国ポルトガルも日本から追放されそうな状況だったのです。

将軍が海外渡航を認めた朱印船が攻撃され、朱印状の権威が侵害されたことをうけて、1631（寛永8）年から老中奉書による「奉書船」制度が始まります。つまり、老中奉書に基づいて、長崎奉行の渡航許可書が発行され、これを持ってはじめて海外渡航が可能になりました。

しかし、オランダやポルトガルなどがお互いに武力攻撃している地域、つまり「武力紛争地域」に出ていく以上、日本船＝奉書船が様々な紛争に巻き込まれるのは避けられません。また、将軍や幕府がその保護を約束する限り、日本船に対する攻撃に報復を行う必要がありました。それができないのであれば、海外渡航をやめさせるしかないのです。

以上のように、日本近海で様々な事件が起きていて危険が隣り合わせであったこと、そして、幕府がそれらの危険から朱印船など日本人を守ってあげられる状況ではなかったこと、などの事情で朱印船などが海外に出て行くことを禁止していきます。

こうした状況の中、３代将軍家光は、1633（寛永10）年、それまでは外様大名にさせてきた長崎奉行を旗本の２人とし、長崎奉行としての職務条目１７箇条を与えます。

1633年に出されたのが、最初のいわゆる「鎖国令」で、「奉書船以外の海外往来禁止」がその内容でした。そして２年後には第３次「鎖国令」が出され、日本人の海外渡航・帰国が全面禁止となります。また1636（寛永13）年には、長崎の有力町人達に築かせた出島にポルトガル人を収容します。日本人の海外渡航全面禁止と相まって、これによってすべての日本人の、国内及び海外でのポルトガル人との接触が規制されました。1639（寛永16）年にはポルトガル人の来航は禁止され、２年後には平戸にあったオランダ商館が出島に移され、いわゆる鎖国が完成します。

アンボイナ事件で英国撤退

ところで、イギリスはどうしたのでしょうか？　オランダと同じプロテスタントですし、オランダよりも強そうな感じがしますが・・・。

実は、イギリスは追放されて日本からいなくなったわけではありませんでした。オランダとの「競争」に敗れて、利益が上がらないから自発的に立ち去ったわけです。しかも、まだ朱印状を持っていました。ですから、自分たちの都合でいつでも戻ってこられると考えていたようです。

では、どうしてヨーロッパ諸国の中で、オランダだけに貿易が許されたのでしょうか？

オランダは『風説書』で海外情報を日本に伝えていたことは知っていますよね。その点を**「ケンペルの見た徳川ジャパン」**で詳しく見ていきますと・・・

イギリスについてはクロムウエルの改革やチャールズ１世の処刑、クロムウエルの失脚、チャールズ１世の息子が亡命先から帰国し、チャールズ２世として即位したこと、その妃はポルトガルから迎え入れられた。イギリスとポルトガルは親戚同士だ・・・・ということを、幕府はイギリス船が再びやってくる３年も前に、オランダからの情報として知っていた。イギリス船が現れて、長崎奉行と接触したとき、幕府はイギリス人から直接それらの情報の裏付けをとっている。この時、イギリスは大事に持ち続けた「朱印状」を持ってきたが、これは現物ではなく案文の写しだった。もちろん日本語で書いてある。・・・。

長崎ではイギリスとの貿易が再開されるかと期待をしたが、江戸から不許可の返事が返ってきた。その理由は、ポルトガル王室との姻戚関係だった。ここで、初めてイギリスという家康の朱印状を持っている国も来貢が禁止されることになり、ヨーロッパのなかでオランダ人だけが日本に来ることが許されるということが正式に決まったのだ。これが延宝元年（1673年）のことで、それが幕末まで先例とされたのだ。

とあります。イギリスとの貿易を許可しなかった理由は何だと書いてありましたっけ？

「ポルトガル王室との姻戚関係」ですね。これは、1673年にイギリス船リターン号が長崎に来航し、貿易再開を要求したのに対して、イギリス国王チャールズ２世の妃がポルトガルの王女だったことを理由に、幕府はイギリスとの貿易を断ったのです。「鎖国」を理由に、断ったわけではないのです。

つまり、最終的に、ヨーロッパ諸国の中でオランダだけが国交の相手として残ることになりましたが、それは結果であって、いわゆる「鎖国令」にオランダだけは通交を許すなどということは書いてありませんでした。いずれにしろ、オランダは上手に日本との貿易を独占することに成功したのです。

ところで、さきほど、イギリスはオランダとの「競争」に敗れて、利益が上がらないから自発的に立ち去ったと書きました。それは「事実」なんですが、「真実」とは言えないのです。

1623年（幕府がスペイン船の来航を禁じる前年になります）に、アンボイナ事件が勃発しました。アンボイナとは、インドネシアの香辛料で有名なモルッカ諸島南方にある小さな島の名前で、この島にあるイギリス商館をオランダが襲い、商館員全員を殺害した事件です。

この時、なんと、日本人９人も殺害されたそうです。なぜ、日本から遠く離れたこんなところに日本人がいたのでしょうか？　彼らは何をしていたのでしょうか？

実は、この日本人は「傭兵」でした。自分から、好きで傭兵になったのではありません。彼らは、日本のどこかの戦場で捕らえられた百姓や子供たちで、東南アジアのどこかで売り飛ばされたのでしょう。そして彼らを売り飛ばして金儲けをしていたのは、日本のキリシタンやその指導者であるイエズス会やポルトガルの商人でした。このことは深入りしませんが、アフリカからアメリカへ売られてきた「黒人奴隷」のことを思い出します。戦国時代の日本では、「戦争奴隷」がそこかしこにおり、人間が日常的に売買されていたことは知っておく意味があると思います。

さて、この事件によってイギリスの香辛料貿易は頓挫し、オランダが同島の権益を独占します。この結果、イギリスは東南アジアから撤退を余儀なくされ、インドへ矛先を向け、ムガール帝国侵略に専念するようになります。そして、インドの良質な綿製品の大量生産によってイギリスは国力を増大させることになるのです。